

平成30年度大淀町×奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所 連携シンポジウム

「吉野・熊野をつないだ偉人 岸田日出男の遺したもの」



【日時】平成30年 **12月 9日 (日)**
13:30～16:30 (13時開場)
【会場】奈良県吉野郡大淀町桧垣本2090
大淀町文化会館

【主催】大淀町文化会館

【共催】奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所 【協力】IMAGICA Lab.



ごあいさつ

平成最後の師走を迎えてご多忙の折、本日ご来場賜りました皆様におかれましては、ますますご清祥の事とお喜び申し上げます。また平素は、本町の文化行政にご支援、ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、みなさんは吉野郡大淀町という何を思い浮かべられるでしょうか。本町は大正10年（1921）に発足して以来97年目の冬を迎え、もうすぐ100周年となります。

奈良県内でも有数の大河・吉野川に面し、里山の豊かさに育まれた本町は、縄文時代以来、人々の行き交う吉野文化の門戸として栄えてまいりました。その人と自然のかかわりによって生み出された歴史・文化遺産は、何事にも代えがたいふるさとの「宝」であるといえましょう。

本町では、ふるさとに眠る大切な地域遺産を見直し、その価値を次世代に伝えていく「地域遺産保存・活用事業」を進めています。このたびのシンポジウムでは、「吉野熊野国立公園の父」と呼ばれた、大淀町出身の偉人・岸田日出男にスポットをあてます。岸田が遺した資料は奈良県立大学地域創造学部によって整理が進められており、そのなかで詳細が明らかとなった、国立公園にかかわる記録、戦前の映画フィルム、絶滅したニホンオオカミの頭骨などの資料から、紀伊半島の原風景に思いをはせ、吉野・熊野地域の過去・現在・未来について、皆様といっしょに学びたいと考えています。

最後になりましたが、本シンポジウムを開催するにあたり、ご協力いただきました関係各位、ご支援いただきました皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

平成30年（2018）12月9日
大淀町教育委員会 教育長 上田 敏之

ごあいさつ

奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所は、山と人間社会と自然環境との共生のための科学「共生科学」を通して、自然の保全と再生を目指すことを目的に平成13年に設置された共生科学研究センターと、古代日本の中心であった奈良に立地する本学の特色を活かし、東アジアの広い視野の中で、日本古代の歴史・文学・言語などを学際的に研究することを目的として平成17年に設置された古代学術研究センター、奈良の社会や文化の特性・課題を現代的視点から読み解き、その成果を外部に発信する新しい試みとして平成16年に文学部を中心に始められた「なら学プロジェクト」を母体として平成29年度に設置されたなら学研究センターの3つの研究センターを基に、平成30年3月に設立された研究所です。

大和・紀伊半島という地域の特徴は、自然と人の営みが密接な関係にあることです。紀伊半島は、森林と河川により形成される景観だけでなく、日本古来の自然崇拝による神道と渡来してきた仏教が融合した独特な宗教観から形成された景観もあります。また、大和（奈良）盆地は、紀伊半島の入口に位置し、日本列島の中でも古くから人間活動の痕跡が残されてきた地域です。紀伊半島では人と自然が長い歴史の中でさまざまな形で共生してきた土地でもあります。

本研究所では、このような地域に着目して、自然環境や生態系に人間活動がどのような形で影響を与えてきたのか、そしてそれが地域の文化とどのようなつながりを有してきたのかについて明らかにする。さらに得られた成果から今後我々がどのようにして自然と共生していくべきなのかを示すことを目的としています。そのために研究所では、自らが研究を行うだけでなく、このような研究に従事する人達への支援も行っています。このたびのシンポジウムが、その一環として意義あるものになることを願っています。

平成30年（2018）12月9日
奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所 所長 保 智巳

プログラム (予定)

司会進行 松田 度 (大淀町教育委員会)

・開会挨拶 上田 敏之 (大淀町教育委員会 教育長)

①オープニングアクト プロモーション映像「岸田日出男の遺したもの」

講師・パネラー紹介 3

②講演 1 「紀伊山地の自然と人間」 13:40~14:00 4

講師 池田 淳 (吉野歴史資料館 館長)

③講演 2 「大和・紀伊半島学からみた岸田日出男」 14:00~14:20 6

講師 寺岡 伸悟 (奈良女子大学教授)

休憩

④講演 3 「岸田日出男資料の整理を通して」 14:30~14:50 7

講師 水谷 知生 (奈良県立大学教授)

⑤講演 4 「戦前の映画フィルムのココがすごい！」 14:50~15:10 9

講師 柴田 幹太 (株式会社IMAGICA Lab.)

休憩

⑥パネルディスカッション「岸田日出男から紀伊半島を深める」 15:20~16:20

パネラー 池田 淳 大石 正 (奈良女子大学名誉教授・G&L共生研究所 所長) 11

柴田 幹太 西谷地 晴美 (奈良女子大学教授) 11

水谷 知生 森本 仙介 (奈良県教育委員会事務局文化財保存課) 12

コーディネーター 寺岡 伸悟

・閉会挨拶 保 智己 (奈良女子大学 大和・紀伊半島学研究所 所長)

〈コラム〉

a 岸田日出男について (附 略年譜) 14

b 戦前の映画フィルムについて 16

c ニホンオオカミの頭骨について 17

d その他の資料 (戦前の植物標本について) 18

講師・パネラー紹介



池田 淳 (いけだ きよし 吉野歴史資料館 館長)

1958年新潟県生まれ。1991年より吉野町教育委員会に勤務し、文化財行政を担当。現在、同教育委員会事務局主幹兼吉野歴史資料館館長。専門は民俗学（日本の芸能を中心に研究）。近著に「吉野の自然と土倉庄三郎・岸田日出男」『紀伊山地三霊場フォーラム 神仏和合で日本の自然は守られてきた』（紀伊山地三霊場会議 2017年）など。



寺岡 伸悟 (てらおか しんご 奈良女子大学教授)

1964年奈良県生まれ。熊本大学、甲南女子大学などを経て、現在、奈良女子大学教授、大和・紀伊半島学研究所なら学術研究センター長。専門は社会学。主な著書に『地域表象過程と人間』（単著・行路社 2003年）、『大学的奈良ガイドーこだわりの歩き方ー』（共編著・昭和堂 2009年）など。



水谷 知生 (みずたに ともお 奈良県立大学教授)

神奈川県出身。1986年から環境庁（省）で国立公園や野生生物関係業務を担当し、外来生物対策室長、近畿地方環境事務所長などを経て、2016年から奈良県立大学教授（地域創造学部）。国立公園史、近代日本の風景認識の形成史、奈良の鹿観光史などが現在のテーマ。専門は地理学。博士（学術）。技術士（環境部門）。



柴田 幹太 (しばた かんた 株式会社 IMAGICA Lab.)

1978年生まれ。株式会社 IMAGICA Lab. ウェスト事業本部映像事業部所属。2008年、前身の株式会社 IMAGICA ウェストに入社。古いフィルムの修復作業に従事しながら、復元案件の提案やコーディネートに携わる。2018年、映画テレビ技術協会優秀制作技術賞（柴田・鈴木賞）を受賞。



大石 正 (おおいし ただし 奈良女子大学名誉教授)

1943年長野県生まれ。元奈良佐保短期大学学長。奈良女子大学 共生科学研究センターの初代所長（2001年に設置）。現在、G&L（グローバル&ローカル）共生研究所 所長。専門は動物生理生態学。主な編著に『光と人間』（朝倉書店 1999年）など。



西谷地 晴美 (にしやち せいび 奈良女子大学教授)

1959年福島県生まれ。奈良女子大学教授、大和・紀伊半島学研究所 古代学・聖地学研究センター長。専門は日本中世史、環境史、過去認識論。著書に『日本中世の気候変動と土地所有』（校倉書房 2012年）、『古代・中世の時空と依存』（塙書房 2013年）、吉野地域を扱った研究として「熊野街道の夜」（『日本史論』敬文舎 2017年所収）がある。



森本 仙介 (もりもと せんすけ 奈良県教育委員会文化財保存課主査)

奈良県五條市生まれ。奈良県立民俗博物館などを経て、現職。神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員。専門は民俗学。博物館で山村民具及び民俗技術の調査に従事。現在は調査報告書と映像による祭りや民俗芸能の記録保存を進めている。「奈良県吉野地方における林業と木地屋」『里と林の環境史』（文一総合出版 2011年）など。

紀伊山地の自然と人間

池田 淳

はじめに

多治比廣成という奈良時代の貴族が、現在の吉野町宮滝周辺の景観を思い起こして書いた漢詩に「吉野之作」があり、日本最古の漢詩集『懷風藻』に収められている。彼が詠うところによれば、当時の宮滝周辺の景観は次のようになる。高嶺嵯峨として奇勢多く、長河渺漫^{びようまん}として廻流を作す。

吉野の山地は険しく、変化に富んでいる。吉野川は限りなく滔々と流れ、曲がりくねって流れている、というところが大意だと思う。最初に宮滝周辺の景観を謳ったといたが、これは宮滝に限定されるものではなく、おおよそ海岸部を除く紀伊半島南部、さらに限定すれば中央構造線以南の紀伊山地に共通する景観とってよい。

こうした共通性をもった自然の中で、私たちのご先祖様は如何に暮らしていたのであろうか。

紀伊山地の自然

門外漢の筆者の拙い自然史の知識によれば、「高嶺嵯峨」なのは、紀伊山地が未だに隆起を続けているからであり、長河こと吉野川が渺漫とするのは、吉野川の水源の一つが日本でも最大の多雨地帯である大台ヶ原であることに起因しているのであろう。吉野川が廻流しているのは、遙かな昔、後に紀伊山地となる地帯が平原で、そこに水が流れ始め、川が蛇行を始めた結果とのことである。熊野へ向かう北山川の蛇行の原因も同じことであろう。平原の時代に大地に刻まれた記憶は、山上ヶ岳や高野山といった準平原と呼ばれる平地に見ることができ、稲村ヶ岳の山頂付近に、河原や海岸といった、浅い水域にある礫岩層があるのも記憶の一つであろう。

この多雨な山地では天然の森林資源が豊かであった。森は地味だけでなく気候にも影響されるので、それぞれの気候に順応した森林が生育した。国の天然記念物に指定されている仏経嶽原始林はシラベ純林及びトウヒ林で形成されているが、シラベとトウヒは、氷期にここに繁茂したトドマツとエゾマツの子孫たちである。同じく国の天然記念物、川上村の三ノ公川トガサワラ原始林のトガサワラも、生きた化石と呼ばれるはるか太古に繁茂した樹木である。気候の変動により大地を覆った森は姿を変えたが、そのいくつかは、吉野の大地に未だに根付いている。

人の信仰と暮らし

険しい山地と豊かな天然の森は信仰の対象となり、紀伊山地の霊場と参詣道という世界遺産となった。平原の記憶である山上ヶ岳や高野山は霊場となり、尾根筋の道は参詣道となった。豊かな天然の森は、この山地で修行

する人々を支えてきた。下北山村の前鬼の集落はその最たる例であり、集落に隣接するトチノキの巨樹群は、稲作に適さないこの地で暮らす人々と、彼らが支えた修行者の大切な食を担ってきた。この集落が修験の修行者たちを支えてきたことは、当地に伝えられた修行の記録「碑伝」^{ひで}によって判明する。現在記録で確認できるものだけでも、古いものは鎌倉時代の永仁3年（1295）の年紀をもっている。もちろん、ここに人が暮らし始めた時期はさらに遡るに違いない。

紀伊山地の天然の森にもう一つの森が加わったのは、そう遠い過去のことではない。室町時代の末期から江戸時代の初頭にかけて、いわゆる吉野林業による人工の森が育てられ始める。これは廻流をなしていた河川の改修とも無関係ではなく、河川改修が進むことにより、より奥地の森が開発されて、天然の森から人工の森へと姿を変えた地域もあった。それでも、紀伊山地の随所には古来より信仰の対象となってきた天然の森も守られてきた。

ところで、人工の森は、信仰の世界とは対立するよう見えるが、実は人工の森を育成し、これを切り出して生計を営んできた人々の暮らしは、信仰の世界とも強い絆で結ばれていた。すなわち、修験の修行者の修行を支えた吉野の人々の家屋の屋根は、地元の材木を加工した曾木によって葺かれていた。曾木を作る人たちがこの山地の各地に住んでいたことがその証左となる。下北山村では、曾木で屋根を葺くことが明治期まで続いていた。

もちろん、河川改修の結果、大経木を都市に運んで利益を生む吉野林業も、人々の暮らしと信仰を支えた経済的基盤の一つであった。

かくして森は守られる！

岸田日出男は、その死の19日前「原始林の祟り」という一文を残している。短文ながら、ここには紀伊山地とその森に精通した岸田日出男が到達した自然観が凝縮されている。岸田は、「私は、三十数年前、友人の一人のインテリと、御神木伐採因果論について語り合っている中に、フトしたことから原始林についても同じようなことあるのに二人共気付き、その後静かに検討を続けているのであるが、この事実を否定することが出来ないでいる。（中略）そこで私共は、原始林に神が宿っているか、或は精が存するのであろうと信じている。」と述べている。ここには、岸田が人生の最後に辿り着いた思想が生きている。

天然の森、人工の森にかかわらず、この大地に育った木々を大切に思い、そこに神の存在までも見いだしてきた岸田の思想は、岸田だけのものではなく、この山地に暮らす人々に共通した思想でもあった。

かくして森は守られる。

大和・紀伊半島学からみた岸田日出男

寺岡 伸悟

奈良女子大学に今年（2018年）3月に設置された大和・紀伊半島学研究所は、共生科学研究センター、古代学・聖地学研究センター、という2つのセンターに、「なら学プロジェクト」という小さな学際的プロジェクトが加わってできたものである。

大学では一般に、たくさんの専門分野に沿ったいわば深く・狭くの研究が行われている。報告者が世話人をつとめてきた「なら学プロジェクト」では、ひとつの作業として奈良・大和の郷土研究者の回顧をおこなってきたが、自らの不勉強を恥じるばかりであった。かつては在野の郷土研究者と大学人との交流も盛んであったことも知られた。ある地域を、ある地域で研究するとはどういうことかを改めて考えさせられた。

浦西勉教授（現・龍谷大学）は、奈良県において、民俗調査を通して郷土文化史を研究した先達たちをいくつかのグループに整理している。それは明治・大正・昭和戦前、そして戦後といった時間軸・世代軸によるもの、また民俗学・文学・歴史学といった専門分野に沿った整理、学校での師弟関係によるもの、などであり、それらが複合して奈良・大和の郷土研究（者）は形成されているとみる。この整理のなかに、「吉野」を軸とした整理が含まれている。そこには岸田日出男、花岡大学、前登志夫、宮坂敏和らの名前があがっている。

ここに挙げられた「吉野」とは、深い歴史、自然環境、信仰文化、民俗などによって彩られた広くて深い含蓄を有する言葉であるといえる。そしてそれは大峯や大台が原、高野山、吉野川→紀ノ川、熊野川、北山川へと、奈良・大和という範囲をこえて紀伊半島全体へとつらなる。吉野の郷土研究者たちは、奈良盆地（国中）と外部（三重、和歌山へとつらなる紀伊半島という大きな探究の舞台）とを結ぶ存在であり、かつ、自然から人文までを相互に深く結びついたかたちで学ぶことの重要性を示した存在であるといえるだろう。岸田日出男とは、まさにそういう意味で、大和・紀伊半島学のさきがけといえる存在といえるのではないだろうか。

報告者にとっても、岸田や吉野の研究者たちの営みについての勉強はまさにこれからといえる段階ではあるが、今回の報告では、これまでに目にした文章などの範囲で、上記の点について語ってみたい。



岸田日出男資料の整理を通して

水谷 知生

報告者は、吉野熊野国立公園の成立過程の研究の中で、岸田日出男の活動についても調査していたことから、大淀町による岸田資料の保存活用事業に協力し、岸田資料の整理作業を進めている。2017-18年度に奈良県立大学の学生と計 44 日間、文書資料と写真資料を対象として整理作業を行なった。資料の内容確認、分類、整理、データベース作成の手順で作業し、以下に資料を分類し整理している。

(1) 自筆資料：自筆原稿など／(2) 古文書写・聞き書き／(3) 文書：刊行されていない各種資料類／(4) 行政文書：奈良県関係／(5) 書簡類／(6) 図書：刊行されたもの／(7) 雑誌：刊行されたもの／(8) 新聞切抜／(9) 地形図：(地勢図、集成図含む)／(10) 作業図(地形図)：地形図を貼り合わせた岸田の書き込みがあるもの／(11) 地図：その他地図類／(12) パンフレット：観光、その他のパンフレット／(13) 絵葉書／(14) 書画類：軸装したもの／(15) その他：色紙等／(16) 写真：焼付け写真・ガラス乾板・ネガ・写真帳

なお、資料の整理・保存に関しては、内務省衛生局で 1921 (大正 10) 年頃から国立公園に関する調査を行い、その後、国立公園制度に長く関与した田村剛 (1890-1979) が残した資料が環境省自然環境局生物多様性センター (山梨県富士吉田市) に整理・保存されている。岸田資料の分類・整理にあたり、田村剛資料の整理・保存方法を参考とした。

<資料の概要>

一自筆資料 (1)：岸田の著作で雑誌などに掲載されたものは、「岸田日出男遺文集 1-16」などの形で製本され残されている。自筆原稿には、これら著作物の草稿段階のものから印刷用原稿まで、多種類のものが残されている。草稿段階のものが何種類も残されているものもあり、すべての原稿を破棄せずに残していたものと考えられる。また、最終的に印刷されなかった原稿も多く残されている。

一古文書写・聞き書き (2) (3)：吉野郡内の各地の寺院や旧家所蔵の古文書を書き写した資料と古老からの聞き書きの記録資料である。岸田が写し取ったあるいは聞き取った場所、時期、内容は多様であり、場所や時期の情報が明記されていない資料もある。今回の整理・リスト化では、資料を逐一解読し、時期や場所、内容の整理をすることは困難であり、古文書写、聞き書き記録の全体像を把握することはできなかった。

古文書写、古老からの聞き取り記録は昭和 20 年代以降のものである。今後、古文書写、聞き書き記録を重点的に整理し、その全体像を明らかにすることによって、岸田の残した資料の意味が明らかになり、その資料的価値が高まると考えられる。

一図書 (6)：書籍は、500 冊程度と多くはない。大正から昭和初期にかけて、吉野群山について記されたものは、ほとんど全て揃っているとみられる。

—新聞切抜(8)：新聞切抜帳（スクラップブック）は33冊を数え、1917（大正6）年から昭和30年代まで、吉野地方の自然保護に関する記事を中心に集められていた他、熊野地方の地方紙も数種類あり、熊野地方の情報収集も丹念に行なっていた。

—地図類(9)～(11)：岸田は吉野地域の地形図をはじめ、旅行で訪れる地域の地形図を購入し、持参していたと考えられる。書き込みのない5万分の1地形図、20万分の1地勢図が180種類、北は十和田、八甲田から、南は霧島まで多く残されている。その他、大峰山系や大台ヶ原の地形図を貼り合わせた作業図も多数残され、山行の行程図もあり、残されている写真と照合することで、撮影場所を特定することが可能なものもある。

陸地測量部の地図以外にも民間発行の分県地図なども多く残されているが、大正年間の「日本府県管内地図」（駸々堂）などは、貴重な資料である。

—書画類(14)：書画類は、掛け軸にしつらえたものが30点弱あり、国府犀東（漢文学者・史蹟名勝の選定に関与）の漢詩、脇水鐵五郎（地質学者・吉野熊野国立公園選定に大きく関与）の書、永井瓢斎（朝日新聞記者・俳人）の書画など、交流関係を重視していた人物が推定されるほか、下北山村前鬼にあった森本坊で描かれた鼠よけの猫絵も2枚、掛け軸に装丁されており、森本坊との関係が強かったことが推定される。

—その他(15)：その他に分類した資料では、色紙類が数十枚残されていた。吉田初三郎（画家・鳥瞰図絵師）が吉野・熊野の各所で残した色紙もみられ、岸田が案内した際に描いてもらったものであろう。

—写真類(16)：写真類は、ガラス乾板、ネガ、焼付写真、写真帳に4分類し整理した。

ガラス乾板は42枚ほど、ほとんどがキャビネサイズであった。岸田が誰かのカメラを借りて撮影したものと考えられる。多くは風景、人物集合写真である。

ネガは440枚ほどあり、ほとんどが手札版のシートフィルムで、岸田が撮影したと考えられる。年代を特定できるネガは多くないが1929（昭和4）年以降撮影のものと推定される。ネガの一部は癒着して分離不能となっており、内容の確認はできなかった。

焼付写真は、台紙に貼られているもの（260枚ほど）、写真帳に貼られているものを含め、3400枚ほどあった。その多くは、大峰山系、大台ヶ原、大杉谷の山、溪谷が撮影されたもので、吉野の桜の写真も多くみられる。瀨峡や熊野海岸の写真は、新宮の久保写真館撮影のものが多く見られ、岸田は吉野、熊野の風景写真を多方面から収集し、広く紹介するために用いていたと考えられる。撮影者が特定できるものは多くない。

写真帳は50冊あまりあり、概ねキャビネサイズの焼付写真が20枚程度貼られており、吉野熊野国立公園協会作成と記された1巻から20巻までのシリーズものが含まれる。吉野群山、北山峡、大杉谷、熊野海岸を網羅的に紹介したもので、1936（昭和11）年の吉野熊野国立公園の指定後、その紹介のための資料として作成、使用されたと考えられる。

残されている写真には、山岳、溪谷の写真のほか、吉野郡内の集落を写した写真も残されている。古いものは吉野・熊野の100年ほど前の景観を写しており、撮影場所を特定できる写真は、現在の景観と比較することで、この100年の様々な変化を検討する材料となる。

戦前の映画フィルムのココがすごい！

柴田 幹太

■映画＝フィルム

「つい最近まで映画はフィルムだった」と言われても、何のことが話題になっているのか伝わりにくい時代になった。これから以下に記すのは、映画がフィルムだった時代、特に 1950 年代以前の、火薬の主成分になるニトロセルロースや、あるいは眼鏡や義歯に使われたセルロイドとよく似た物質である「ナイトレート（セルロース・ナイトレート）」からフィルムが作られていた時代の話にさかのぼる。

■映画フィルム＝動画メディア＝危険物＝文化財

薄く透明で柔らかく強度もあるプラスチックの帯の上に感光材料を含むゼラチンを塗布し、少しずつ異なる静止画を連続して記録したものが映画フィルムである。それを映写機にかけスクリーンに投射することで、「動く映像」として見ることができる、動画再生のための媒体（メディア）だ。映画は誕生から 100 年以上、フィルムだった。デジタルが主流になったとはいえ、今でも映画やテレビ CM など変わらずフィルムは使われている。そのフィルムの材料が 1950 年代以前はナイトレートで、それ以後は安全面を考慮して不燃性の素材に置き換わっている。

発火力の強い爆薬と似た性質を持つナイトレート・フィルムは現在、日本では消防法で保管や取り扱いが規制される「危険物第五類（自己反応性物質）」に分類される。天災や戦災などで多くのナイトレート・フィルムが焼失し、小津安二郎や溝口健二の初期作品を含むたくさんの映画作品が世界中で永久に失われた。国立映画アーカイブの所蔵作品数を基にした日本劇映画（戦前はほぼすべてナイトレート・フィルム）の残存率は 0.2%（1910 年代）から 11.7%（1930 年代）と試算され、特に最初期の映画フィルムのほとんどが失われてしまったことがよくわかる。

他方、日本最初期のアニメーション映画『なまくら刀』などのように、近年でも「失われた映画フィルム」が思いもかけないところから発見されることが少なくない。上に挙げた残存率を考慮すれば、新たに発見されるあらゆるナイトレート・フィルムがすべて貴重であるということもできる。そしてその象徴的なできごととして、日本では 2009 年から 3 年連続で『紅葉狩』（複製ネガ）、『史劇 楠公訣別』（オリジナルネガ）、『小林富次郎葬儀』（オリジナルネガ／上映用ポジ）のナイトレート・フィルム 3 作品、計 4 ロールが国の重要文化財に指定されている。上映が終われば廃棄されることの多かった消耗品の「動画メディア」であり、激しく燃える「危険物」でもあるナイトレート・フィルムが、名実ともに「文化財」になった記念すべきできごとだった。

■映画フィルムの劣化と復元

フィルムは湿度や温度など環境の影響を受けやすく、保存に適さない劣悪な環境に置かれた場合には変質・劣化してしまうことがよく知られている。極度に乾燥してしまったもの、反対に湿気を帯びてしまったもの、破損などの物理的ダメージを負ったもの、カビが生えたもの、汚れの付着したもの、変色・褪色してしまったものなど、環境次第でその劣化症状は多岐にわたる。私たちフィルム修復の技術者は、患者を診る医者のように、劣化

フィルムの症状を診断し（状態調査）、カルテを書き（報告書）、処方箋を書き（復元方法の検討）、必要に応じて応急処置を施したり手術したりする（修復作業）。

復元方法も症状や目的に合わせて細分化されている。簡単なクリーニングで済むフィルムもあれば、文化財としての保存・活用を視野に1コマずつ細心の注意を払いながら時間をかけて修復・複製されるフィルムもある。またその技術も、古くから用いられる写真光学的なアナログ技術から、最新のデジタル修復技術まで幅広く、フィルム所有者の将来的な活用目的や保存環境に応じて、できるかぎりご希望に沿うようなお手伝いをするのを私たち技術者は心がけている。

■映画フィルムの同定： 大淀町のモデルケース

岸田家から見つかった4本のフィルムはいずれもナイトレート・フィルムだった。しかし作者や製作年を示す確かな記録がなく、題名が記されていたと思われる缶票（フィルム缶に貼られたラベル）も剥落しており、詳細不明の状態だった。錆びたフィルム缶の外見に反して、フィルム自体の状態は比較的良好で、手に負えないような深刻な劣化は初見では見られなかった。それぞれのフィルムをまずは試写できるように簡易のデジタル化（動画データ化）を行い、研究者に映像を見てもらい内容確認を進めた。同時に、ナイトレート・フィルムを適切に保管し取り扱う環境のある弊社でお預かりし、慎重にフィルムの調査を行なった。

4本のうち2本のフィルムは白黒のポジ・フィルムに着色されており、1920年代ごろのフィルムであると想定することができた。また、1本は撮影ネガを編集したオリジナル・フィルム（原版）であり、いずれのポジ・フィルムとも長さが異なっていた。唯一音声のある1ロールは、独立した作品『熊野路』であることが判っていたが、検閲印が刻印されており、より詳細な当時の状況を調べるのが可能だった。『熊野路』のクレジット・タイトルから、現存しない組織や業者が製作に携わっていることも判明した。さらに4本それぞれのフィルム自体に、製造年を特定できるエッジコードと呼ばれる記号が焼き込まれており、作品の製作年の絞り込みに役立った。

フィルム自体から判る情報に加え、部分的に読み取れる缶票の文字、ネガのフィルム缶に収められたメモなど、フィルムに付随する情報をまとめ、研究者が調査した映像内容や、登山隊の旅行記録や奈良県内での映画上映の記録などを照らし合わせた結果、『吉野群峯』（1922年）、『瀨八丁実写』（1923年）、『熊野路』（1937年）という3作品が特定され、『吉野群峯』と『瀨八丁実写』にはフィルムの欠落があることも判明した。

約100年にわたり岸田家に伝えられた映画フィルムの調査には、たくさんの発見があった。言い換えれば、文字だけで語られてきた国立公園指定のための調査登山のみならず、紙資料でしか記録されてこなかった奈良県内で映画上映の歴史を、ナイトレート・フィルムの発見と調査が正確に裏付けた、典型的で幸福な例だということができる。（おわり）



1922年のナイトレートフィルム（岸田日出男資料「吉野群峯」第3巻より）

紀伊半島の自然研究

大石 正

紀伊半島は、日本の半島の中で、最大の半島であるとともに、日本の中央に位置し、亜熱帯から亜寒帯にいたる気候、降雨量、地質などに特徴を有している。また、縄文時代以来の文化的歴史に富み、早くから自然に関する研究が行われている。

江戸時代末期には、紀州本草学の畔田翠山（源伴存）が、「和州吉野郡群山記」などを表し、明治から昭和にかけては、南方熊楠が、紀伊半島における粘菌研究などを含め博物学、生物学、民俗学などを行った。さらに、岸田日出男が吉野・熊野の自然を保護すべく「吉野熊野国立公園」の設置に力を尽くした。

このような紀伊半島の自然に関する業績を元に、奈良女子大学においては、津田松苗による水生昆虫学、水質汚濁の生物学、そして、小清水卓二による「万葉の草・木・花」、「奈良の自然」などの植物学に関する研究成果があり、水生昆虫学は川合禎次に、水質汚濁の生物学は渡辺仁治に、植物学は菅沼孝之に引き継がれた。これらの業績をもとに名越誠は、奈良県、和歌山県、三重県、大阪府の紀伊半島を囲む大学に呼びかけ「紀伊半島研究会」を設立した。さらにそれを基礎に、奈良女子大学に共生科学研究センターが2001年に設置された。

現在、「共生科学研究センター」は、「古代学・聖地学研究センター」及び「なら学研究センター」とともに、「大和・紀伊半島学研究所」を構成している。

【参 考】

- 畔田翠山（くろだ すいざん 1792-1859）：紀州和歌山藩に仕えた藩士・本草学者。通称は十兵衛。
- 南方熊楠（みなかた くまぐす 1867-1941）：和歌山県出身の博物学者。紀伊半島の自然保護に尽力。
- 津田松苗（つだ まつなえ 1911-1975）：日本における水生昆虫学のパイオニア。
- 小清水卓二（こしみず たくじ 1897-1980）：植物学者（理学博士）。奈良県の植物研究を牽引。

パネリストからの視点

西谷地 晴美

吉野郡を中核に据えた紀伊半島の過去・現在・未来を語る時、自然と宗教は欠かせない。奈良女子大学の古代学学術研究センターを、古代学・聖地学研究センターに改称した理由の一つはそこにある。また、その宗教的聖地の存立は、紀伊半島の山野河海など、歴史的な自然環境が前提になっている。

だから岸田日出男の仕事との関係で言えば、共生科学研究センターだけでなく当センターにおいても、自然環境への視点が重要になるだろう。

ところで、現代社会が直面している解決困難な課題のうち、人類にとって最も緊急性の高い環境問題は、2つある。種の大量絶滅の進行と、地球温暖化である。実は、岸田日出男の仕事は、この2つの問題と密接に関わっている。

過去5億年間に、地球上で種の大量絶滅は5回あった。現在、地球上で、6度目の種の大量絶滅が進行中である。ニホンオオカミの絶滅は、現在進行中の種の大量絶滅の一コマに過ぎないが、ニホンカワウソの絶滅同様、日本においては象徴的な事件である。

地球温暖化問題は、さらにやっかいな話で、気候が別のステージに不可逆的に急激に移行し始める転換点（ティッピングポイント）の有力な目安とされている、大気中の二酸化炭素濃度450ppmまで、あと40ppmしかない。近年の上昇度合いは年2~2.5ppmなので、早ければあと10数年で、人類は極めて危険な状況に到達する。地球の二酸化炭素吸収能力が飽和に達しつつあるのではないかとの危惧が、科学者から出される時代に入っている。その二酸化炭素の吸収に重要な役割を果たしているのが森林であり、吉野熊野国立公園設立の現代的意義を再評価する必要があるだろう。

岸田日出男による篠原踊りの「発見」—国立公園設立運動の余白に—

森本 仙介

昭和30年（1955）に奈良県指定、昭和46年（1971）に国選択の民俗文化財となった五條市大塔町の篠原踊りは、20曲以上の近世小歌を伝承する代表的な風流踊りであり、民俗学や芸能史をはじめ様々な分野から学術的関心を集めてきた。記録上の初見は、弘化4年（1847）頃の成立とされる『和州吉野郡群山記』で、大正4年（1915）の『奈良県風俗誌』がその次に早い時期の報告であるが、最初に総合的な篠原踊りの紹介をしたのは岸田日出男であった。



篠原ノ仙境(岸田日出男資料・吉野熊野国立公園協会アルバムより)

吉野山岳会副会長でもあった岸田は昭和3年（1928）に『吉野群山の叢書』を吉野山岳会吉野支部から刊行し、「昭和聖代の今日尚現実に見る大古そのままの桃源郷 奥吉野山中の篠原部落に遺る数々異習奇談」を発表している。当時、岸田は昭和2年（1927）に吉野国立公園期成会を設立して幹事となり、県公園課に身を置きながら

吉野熊野国立公園の設立運動の中心となっていた。1月中旬の数日を篠原で過ごし、古老から昔の踊りの様子を聞き書きしており、大正13年(1924)頃より何度か篠原を訪れていたようである。報告は実際の観察ではなく、恐らく幕末から明治初期頃の実演の間接的な伝聞であった。その「非常な文飾」(宮本常一)が施された文体は、国立公園指定運動の一環として、吉野の文化的・歴史的側面を強調し、世間に広く喧伝する効果を狙ったものであり、衰退しつつある踊りに向けられた一種の文化財的なまなざしに支えられていた。

昭和4年(1929)6月には大阪放送局の大阪行幸記念地方民謡放送に篠原踊りが出演する。当初は上北山村の北山節も放送の予定であり、大峰山脈の東西から「吉野群山」の郷土芸能を出演させる意図があったのであろう。

「吉野山地民謡集」(岸田日出男資料)は、放送の選定・推薦に関与していたのが岸田であったことが推測できる自筆史料であり、公演の消息を伝える新聞には『吉野群山の叢書』と同文の狼退治起源譚と南朝起源譚が掲載されている。さらに同年8月、県公園課岸田の引率のもと、篠原踊りと阪本踊りは、東京三越の国立公園展覧会に奈良県出展の「大峰及び大台ヶ原を中心とするパノラマ」に伴う「郷土舞踊」として出演した。国立公園指定を受けるため、展覧会に出品する必要性を県上層部に強く訴えた岸田による努力が実ったものであった。

岸田によって、篠原踊りは焼畑と杓子作りを生活基盤とした山深い秘境の木地屋集落に伝わる、南朝伝説と狼伝説に彩られた「郷土芸能」として発見、宣伝されるとともに、地元では東京や大阪での放送・公演に際して「保存会」を称し、「由緒」を携帯するようになっていた。宮本常一は狼退治起源譚の註で「この伝説は篠原踊りの保存会が、他地方へ踊りに行って踊る前にその由来を先ず述べねばならぬために書きつけられたものがあって、それを要約した」と記している。昭和10年(1935)刊の小寺融吉編『日本民謡辞典』にも項目があるように、篠原踊りの名はすでに昭和初期には東京にも伝わっていた。昭和14年(1939)5月、当時近畿民俗学会に所属していた宮本常一は生駒山観光ホテルで開かれた吉野熊野国立公園協会の座談会に招かれ、岸田から3年前(昭和11年)に実施した吉野地方への調査の再開を強く勧められた。宮本は同年8月26日には大淀の岸田宅で紹介状を書いてもらい、篠原の阪谷留吉から聞き取りをしている。この時の吉野地方の記念碑的な民俗誌が昭和17年(1942)に日本常民文化研究所から刊行された『吉野西奥民俗探訪録』である。また戦後の昭和34年(1959)刊の『大塔村史』には民俗芸能研究の大家である本田安次と岸田日出男の次男の文男による篠原踊りに関する2本の報告が所収されている。両者ともに昭和初期より篠原踊りの中心的な指導者であった阪谷留吉からの聞き書きであり、昭和33年(1958)に本田安次を現地に案内したのもやはり岸田日出男であった。

大正末期の篠原踊りの紹介から、昭和初期の大阪や東京での公演、戦前・戦後の宮本や本田といった研究者の現地コーディネイトに至るまで篠原踊りの保護とその研究史は岸田日出男とともにあったのである。

岸田日出男について～紀伊半島の自然を守った男～

岸田日出男（英夫）は、明治 23 年（1890）11 月 30 日、教員だった父・栖造の長男として、旧高見村木津（現東吉野村木津）で生まれました。その後、大淀村（北六田）に移住。明治 41 年（1908）に奈良県立農林学校（大淀町下瀬）の林科を卒業後、吉野郡役所（後に奈良県）の技手（技師）として職を得ました。

大正 5 年(1916)4 月 10 日、吉野山で東京帝国大学の白井光太郎博士しらいみつたろうの講演「吉野名山の保護について」を聴き、吉野群山の山岳溪谷や森林の美しさのもつ価値に気づいたと、昭和 11 年（1936）の自著『吉野群山』に記しています。当時、紀伊半島や奥吉野の自然が、森林開発やダム建設による電源開発によって、急速に失われようとしていました。彼は、その豊かな自然を保護するため、吉野群山を「国立公園」にしたいと考えるようになり、多くの仲間たちとともに、吉野郡の山中を隅々までくまなく歩き、その実態を調べました。

やがて、幾多の苦勞を経て「吉野熊野国立公園」が指定を受けたのは、昭和 11 年（1936）2 月 1 日のことでした。彼は、地元吉野で国立公園指定運動の要として活躍したことから「吉野群山の主」「吉野熊野国立公園の父」とも呼ばれています。

昭和 21 年（1946）の奈良県退職後も、彼は紀伊半島に押し寄せる開発と観光、自然保護との調整に東西奔走し、失われていく山村の民俗や暮らし、伝承を克明に聞き取り、北六田の自宅に膨大な記録と研究資料を遺しました。昭和 34 年（1959）4 月 6 日、道半ばの 68 歳で急死。昭和 36 年（1961）11 月 5 日には、その業績を讃える顕彰碑が、山上ヶ岳（天川村）近くの大峯奥駈道沿いに建てられています。

大淀町北六田の岸田家には、既に失われてしまった戦前・戦後の生活の記憶や、広大な紀伊半島を舞台にした人と自然とのかかわりが、映画フィルム、写真、聞き取り記録類で克明に遺されていました。ダンボール箱にして 60 箱をこえるこれらの資料は、彼の没後、子息の岸田文男（1919－2015）が資料の保存・管理をしていましたが、2018 年 1 月 15 日、岸田家から大淀町に寄贈されました。



岸田日出男(1890－1959)

【参考文献】

岸田日出男（笹谷良造と共著）『吉野群山』1936 年

奈良新聞社編「岸田日出男」『大和奈良県近代の歴史』1979 年

岸田日出男（英夫）略年譜

西暦(年)	和暦(年)	年齢(歳)	事績など
1890	明治23	0	11月30日、吉野郡田高見村木津(現東吉野村木津)で、小学校教員・岸田楷造(1869-1934)と妻・マズエの長男として出生。
1891	明治24	0	6月10日、戸籍に出生届(本籍は高市郡高取町清水谷)。以後、吉野郡内を転々としながら幼少期を過ごす。
1901	明治34	10	楷造の最後の赴任地、大淀村(北六田)に移住。明治38年(1905)3月、大淀村立大淀高等小学校(越部)を卒業。
1908	明治41	17	3月、奈良県立農林学校林科卒業。吉野郡内の小学校代用教員、京都府・奈良県の農林学校教員として勤務。
1913	大正2	22	2月、吉野郡役所(上市)に就職。農業技手として勤務。
1912	大正4	23	7月26日より10日間、阪本仙次、木本光三郎、岩本武助らの一団が大峯山脈を縦走。岸田も同行(木本光三郎著『吉野郡峰』)。
1916	大正5	25	4月、吉野山で白井光太郎の講演「吉野名山の保護について」を聴き、自然保護に目覚める。
1919	大正8	28	長男・文男(1919-2015)出生。以後、妻・キヨとの間に、長女・二美子、次男・友吉、次女・安喜が出生。
1921	大正10	30	2月11日、大淀町町制施行。
1922	大正11	31	8月、内務省衛生局による大峯山系・大台ヶ原の映画撮影に同行(「吉野群峰」としてフィルム現存)。
1923	大正12	32	3月、吉野郡役所を退職。奈良県技手となる。5月頃、「瀨八丁実写」(フィルム現存)の撮影(岸田も関与したか)。9月1日、関東大震災。
1926	大正15	35	3月頃、英夫を日出男に改名。吉野郡役所廃止。
1927	昭和2	36	11月、吉野国立公園期成会を設立。幹事となる。
1931	昭和6	41	1月、近畿国立公園期成同盟会を設立。
1932	昭和7	42	大淀町北六田の国道沿いに、父・楷造の頌徳碑建立。10月、吉野熊野地域が国立公園候補地に選定。
1936	昭和11	45	2月1日、吉野熊野が国立公園に指定。笹谷良造との共著『吉野群山』を刊行。以後、表彰、感謝状多数授与。
1937	昭和12	46	吉野熊野国立公園協会常務理事に就任。
1939	昭和14	48	10月、内閣より地方農林技師に任じられ奈良県農林技師となる。醍醐寺三寶院より権大先達に補される。
1940	昭和15	49	8月、聖護院門跡より参仕大先達に補される。
1943	昭和18	54	勲六等瑞寶章を授与される。昭和19年(1944)12月、宮内省より従六位に叙される。
1946	昭和21	55	3月、願いにより奈良県を退職。4月、吉野熊野文化協会専務理事に就任。
1950	昭和25	60	奈良県観光課嘱託として昭和30年(1955)まで勤務。
1951	昭和26	61	吉野熊野国立公園協会奈良県支部常務理事に就任。
1959	昭和34	68	4月6日、大阪にて急逝。享年69歳。大淀町北六田・安養院にて葬儀。戒名は「天然院愛護居士」。
1961	昭和36		11月5日、吉野郡天川村・山上ヶ岳の大峯奥駈道沿いに顕彰碑建立(除幕式の映像記録フィルムあり)。
1964	昭和39		吉野史談会・花園大学(1909-1988)と岸田文男が、遺稿「日本狼物語」(『吉野風土記』第21巻)をまとめて刊行。

戦前の映画フィルムについて～よみがえる吉野・熊野の原風景～

平成 28 年（2016）12 月、岸田日出男が暮らした奈良県吉野郡大淀町北六田の自宅から多くの歴史資料とともに古びた映画フィルム 4 巻が発見されました。そのフィルムに遺されていたのは、今からおおよそ 100 年前にさかのぼる吉野・熊野の原風景でした。最古のものは、大正 11 年（1922）8 月に撮影された、大峯奥駈道や大台ヶ原の映像であることが判明しました。現在のところ奈良県内を撮影した最古の映像となる可能性があります。



「吉野群峯」第 2 巻:15 分 44 秒
(八経ヶ岳～前鬼 大峯奥駈道)

「吉野群峯」（よしのぐんぼう 1922 年）

大正 11 年（1922）8 月、内務省衛生局の撮影隊は大峯山系・大台ヶ原の映像をカメラにおさめました。岸田も吉野郡役所の職員として、撮影隊に同行していました。それを編集したサイレント映画「吉野群峯（全 3 巻）」は、吉野地域を映像化した現存最古の作品です。今回みつかったのは、全 3 巻のうち第 2 巻（八経ヶ岳～前鬼 大峯奥駈道）と第 3 巻（大台ヶ原～川上村大滝）です。いずれも映像にタイトルはありませんが、収納缶に「内務省衛生局撮影 吉野群峯写真」の表書きがあり、それを作品名としています。



「吉野群峯」第 3 巻:8 分 48 秒
(大台ヶ原～川上村大滝)

「瀨八丁実写」（どろはっちょうじっしゃ 1923 年）

「瀨八丁実写」は、大正 12 年（1923）の 5 月頃に撮影されたとみられるサイレント映像の一部です。ネガフィルムとして残されていたもので、正式な作品としては公開されていませんが、収納缶のなかに「瀨八丁実写」のメモ書きがあり、これを作品名としています。その映像には、奈良・三重・和歌山県の三県にまたがる瀨峡（特別名勝・天然記念物の瀨八丁）が登場します。そそり立つ岸壁や川下りの舟、いかだ流しのようすなど、おおよそ 100 年前の瀨峡が記録された貴重な映像です。



「瀨八丁実写」:7 分 47 秒

『熊野路』（くまのじ 1937 年）

映画『熊野路』は、昭和 12 年（1937）の作品です。鉄道省の企画で制作され、J・O（ゼーオー）・スタチオが撮影と編集を、日本ビクター管弦楽団が音楽を担当しています。

フィルム撮影は、吉野熊野国立公園が指定をうけた昭和 11 年から翌 12 年にかけておこなわれたようです。映像は、和歌山県南端の串本から始まり、那智・新宮・瀨峡・本宮をへて三重県熊野市にいたります。南紀熊野の名所や人々の暮らしが、BGMとナレーションにあわせて紹介されています。



『熊野路』:12 分 31 秒

ニホンオオカミについて～頭骨が語る自然文化史～

岸田日出男資料に含まれるこの動物の頭骨（上顎骨）は、長さ約21cm。昭和10年代に、奥吉野の山中、吉野郡上北山村の天ヶ瀬で、岸田日出男が地元の方からもらいうけたものです。複数の研究者による鑑定の結果、ニホンオオカミの頭骨である可能性が非常に高いとされているものです。

ニホンオオカミは、明治38年（1905）、吉野郡小川村（現東吉野村）の鷲家口で捕らえられたのを最後に絶滅したとされています。この鷲家口のニホンオオカミについては、イギリスの大英自然史博物館で毛皮と頭骨が標本として保存されているほか、発見地近くの道路脇にニホンオオカミのブロンズ像がたてられています。

岸田は、かつて生きていたニホンオオカミの記憶をたどって、紀伊半島の各地で克明な聞き取りをおこないました。その記録は彼の死後、吉野の郷土史家・児童文学作家の花岡大学（1909－1988）と子息の文男（1919－2015）の手によって『吉野風土記』第21集（1964年）の特集「日本狼物語」としてまとめられ、公表されました。これは後に、『日本狼物語（復刻版）』（秩父宮記念三峯山博物館編・2014年）として再版されています。

オオカミ先生・岸田日出男が遺した、吉野で唯一のニホンオオカミの手がかりとして、この頭骨は貴重なものといえます。



ニホンオオカミの頭骨(岸田日出男資料)

その他の資料（戦前の植物標本について）

岸田日出男資料のなかには、引き出しのある木製の収納箱に保存されていた植物標本があります。これは、奥吉野の大峯・大台ヶ原付近（吉野郡上北山村）で採集した植物を乾燥させ、押し葉（さく葉）にしたもので、あわせて199点を数えます。標本は虫害により原形を著しく失っているものが46点（全体の約25%）ありますが、おおむね良好に保存されています。

採集年代をみると、大正4年（1915）7月に大峯奥駈道沿いの孔雀岳で3点採集されていますが、それ以外は大正6年（1917）年8月に集中して採集されたものです。敷紙として使われていた新聞紙の日付から、大正8年（1919）6月下旬から7月初旬に標本として整理されたと考えられます。採集者は「B, IWAMOTO」

と記されており、岸田の友人で、昭和3年（1928）から衆議院議員として国政に参画した上北山村出身の岩本武助（1882-1936）と考えられます。同定者については、植物に造詣が深い奈良県師範学校の教諭で岩本と親しかった鈴木静穂などが想定されます。

岸田がこの植物標本を保管していた理由はわかりませんが、岸田が岩本からゆずりうけたのかもしれない。

詳しい調査は今後の課題ですが、奈良県内に遺された数少ない戦前の植物標本として貴重です。

植物標本の一部
（トサノモジガサの記名）





オオヤマレンゲスケッチ
(岸田日出男資料より)

平成 30 年度大淀町×奈良女子大学 大和紀伊半島学研究所 連携シンポジウム
「吉野・熊野をつないだ偉人 岸田日出男の遺したもの」資料集

平成 30 年(2018)12 月 9 日(日)

編集 奈良県大淀町教育委員会

〒638-0812 奈良県吉野郡大淀町検垣本 2090

TEL 0747-54-2110 TEL 0747-54-2112